

人物で語る 日本デンマーク

①はじめのことば

「日本デンマーク」という名は、安城の代名詞になっている。

この名を聞くと、いくらか誇りに思うけれども、「なぜ日本デンマークというのか」と尋ねられると、一口には返事ができず、しばらく間をおくことになる。そして「全国どこよりも農業の近代化が進んだ地域だったからである」と答えることになる。

では、どのような面が進んでいたのであらうか。

安城地方の農村は、どこも産業組合を作り、その組合を軸にして協同事業（信用・購買・販売・利用）を盛んに行っていた。そのことを指して、日本デンマークといわれるようになったという。

そこに至るまでの過程を追ってみると、大きな要素として、

- (1) 明用水の開削
- (2) 台地の開墾による農地の増加
- (3) 農業教育の普及

- (4) 産業組合の設立
 - (5) 多角形農業の導入
- をあげることができる。

(1)と(2)によって、農業の先進地になるための基盤づくりができ、(3)によって新しい農業への方向づけがなされ、(4)によって個々の農家が同一目的のために協同して事業を行うようになった。そのうえ、農業経営の改善を図るために(5)の多角形農業を取り入れ、コメづくりだけの農業から脱して、野菜やくだものを作り、カイコにニワトリ、それにブタやウシを飼うなどの農業に転換していった。この全体像を指して、日本デンマークと呼ばれることになったといえよう。

ここに到達するまでには、各々農家の働きはいうに及ばず、それぞれの分野に、優れたリーダーがいたことを見落としてはならない。とりわけ初代農林学校長、山崎延吉のぶきちの存在は大きい。碧海郡農村のデザインをしたばかり



山崎延吉先生胸像（安城農林高校）



我農生句碑
（大聖寺／岡崎市中之郷町）

「褒貶ほうてんのうはさをよそに案山子かめしかな」延吉

か、農家の経営の改善にも力を入れたからである。また、その協力者として、安城町長の岡田菊次郎、町農会の岡田庄太郎、産業組合関係には岩瀬和市・水上伝三郎・杉浦彦次、農事試験場には岩槻信治（コメ）、高橋広治（ニワトリ）、農場経営には板倉源太郎などが活躍し、日本デンマークを支えていたのである。

ほかにナシ・スイカ・ナタネなどにもそれぞれリーダーシップをとった人物がいた。

これらの人々がそれぞれの分野において、どのようにして日本デンマークを築いていったのかを明らかにしていくつもりである。

文 神谷素光

※日本デンマークを築いた人々に一人ずつスポットをあて、毎月1日号で紹介していきます。お楽しみに。